



人
造
少
女

ぼく

とんとんとん

いつも通りの地下室へ階段を下っていた筈が
そこにはヒトの影がありました。

黒髪の流れる

女の子に見えました。

滑車のついた椅子と

首輪と足枷

誰かに捕まっている気がして

捕まえられた気がして

近づいてみました。

鎖を解いてみたらどうなるだろう？



足音が近づいて
知らない形をしていたから
男の子だと思いました。
男の子に見えたそれは
私の首輪を外しました。
私は声を与られていないので
何も発する事は出来ません。
飼い主様に着けてもらった首輪と
私が暴走しないようにしっかりと留めて下さっていた
足枷を外しました。

ぼく

虚ろな目をしているけれど
僕の姿は見えるのか気になりました。
動こうとしないけれど
歩けるのか、気になりました。
流れる黒髪と流れる虚ろな目と
周りに置いてある処置道具
この子はきっと悪い人に捕まえられてる
そう思いました。
手を差し伸べてみました。

わたし

鎖が外れました。
お椅子から離れました。
ずるりと
こちらへ来いと
首輪を引っ張られました。
引き摺るように
私は感情を与えられていないので
寂しいと思いました。
なので、ほんの僅かですが
笑顔を造りました。





彼女は笑ってくれました。

やっぱりここは悪い人の部屋なんだと思いました。

悪い人に捕まえられたんだと思いました。

こっちへおいで

僕が連れ出してあげる。

ゆっくり ゆっくり

彼女は動き出しました。



寂しいと思いました。

長い時間、お椅子に座る事が出来ていたのに
首輪を引っ張る力がどんどん強くなっていきます。
引き摺る力がどんどん強くなっていきます。
長い時間、飾っておいて下さっていたのに
どうやらお別れの様です。

わたし

私は脚を切り落とす事にしました。

行きたくありません。

ここから離れたくありません。

私は危険なものです。

歩き出すことは出来ません。

ぼく

上手く歩けないようです。

彼女を抱きかかえるには

僕には腕が足りません。

足掻くことは果たして美しい事なのでしょうか

籠の方が良いのでしょうか

檻の方が、良いのでしょうか。

そして逃す方が

良いのでしょうか。

ぼく

綺麗だと思いました。

長い黒髪が綺麗だと

ゆるりと揺蕩うように

首を絞めるように絡んで

輪郭を撫でてみると

優しい冷たさでした。

それでも、上手く抱きしめる事が出来ませんでした。

わたし

発情した蛇のよう。

ぐちゃぐちゃに絡み最後は呑み込む

神話のウロボロスのよう。

私は帰りたいかった。

それでも、何も発する事は出来ません。

少し拒絶してしまえば

壊れてしまうから

窒息する抱擁をして

いっそもう一度 拘束して

引き摺られる方がいいと

そう思いました。

電磁波の翼では

飛ぶことは、所詮出来ません。

にんぎょうになりたかった。

なぜ哀しい事というものは与えられていたのか

なぜ、寂しいというものは与えられていたのか。

もう思い出せません。

うごいて、私の脳髓。

にんぎょうには心が無い。

所有者は次々と変わる。

簡単に棄てる

簡単に棄てられるんです。

貴方たちの生きるペースが

早いとでも言いたいのでしょうか。

終りにしましょう。

人造少女

<http://p.booklog.jp/book/117996>

著者：黒耀

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kokuyou-akr/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/117996>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト